

## 「盲人の癒し」

2022年02月16日

イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その両目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、見つめているうちに、すっかり治り、何でもはっきり見えるようになった。(マルコ福音書8章23節～25節)

主イエスと弟子たちの宣教団一行はベトサイダに着いた。すると、人々が一人の盲人を連れて来て、触れていただき、目を開けてもらいたいと願った。民衆の宗教教育に当たっていたファリサイ派の人々は、盲人は罪を犯し、神から裁かれた「罪人」として、共同体から排除していた。しかし、民衆は盲人に心を寄せ、彼が見えるようになるために、主イエスの所に連れて来た。宗教的権威者たちは自分の立場を強めることにあらゆる手立てを尽くしていたのに対し、民衆は生きることに重荷を負わされた人への深い同情を持っていたことを示している。主イエスは、盲人の手を取って、村の外に連れ出し、二人きりになられた。そして、彼の両目に唾をつけ、両手を頭の上に置き、「何か見えるか」とお尋ねになった。彼は、見えるようになって、「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります」と答えた。ぼんやり見えるようになったという返答である。そこで、主イエスはもう一度両手を彼の目に当てられた。彼は、見つめているうちに、すっかり治って、何でもはっきり見えるようになった。主イエスは、一度で完治する奇跡を行っているが、この盲人の場合には、段階的に視力が回復していった特異な奇跡を伝えている。

主イエスは彼に、「村に入ってはならない」と言って、自分の家に帰された。「イエスの秘密」を守られた訳である。目が見えるようになって、彼はどれほど喜んだであろうか。マルコ福音書の著者は、神の子イエスの力強い業を証言している。

私が遣わされた宮崎県延岡市の教会には、盲人が四人おられた。この方々の誠実な信仰から多くのことを学んだ。礼拝前に見えて、盲人用讃美歌に付箋をつけて、用意していた。そして、説教をよく聴いてくださった。大体、私を励まそうと褒めてくれた。ある時、「先生、今日は夫婦けんかをしましたね」と言われた。私の説教の口調で、夫婦けんかをしたことを見抜かれるのかと驚愕した。聴く耳を持っておられたのである。

盲人の方々は皆、盲人の目を癒された時に主イエスが語られたヨハネ福音書9章の言葉に生きる勇気を得ておられた。主イエスと弟子たちが歩いていると、一人の盲人が施しを求めて道端に座っていた。弟子たちは、「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」と問うた。彼の面前で問うことは心ないことであったが、この問いは、盲人自身も悩み抜いてきたことで、答えを得ることができないでいた。主イエスは、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである(ヨハネ9:3b)」と答えられた。盲目になったのは自分の罪でも、両親の罪でもない、神の業が現れるためであると聞いた。初めて聞いた神による「生の絶対的肯定」の言葉である。主イエスは泥をこねて、彼の目に塗り、「シロアムの池に行って洗いなさい」と言われた。行って洗うと見えるようになった。

教会の盲人の方々は主イエスに目を開けてもらってはいない。苦悩はそれぞれ深かったが、自分の人生で神のお役に立てると、信仰生活を何より喜んでおられた。